HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	音楽祭を利用した芸術教育 ： 「PMFの響き」の理念と実践
Author(s)	三浦, 洋
Citation	高等教育ジャーナル, 11, 63-72
Issue Date	2003
DOI	https://doi.org/10.14943/J.HighEdu.11.63
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/28795
Type	departmental bulletin paper
File Information	11_P63-72.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

音楽祭を利用した芸術教育
―「ＰＭＦの響き」の理念と実践―

三 浦　洋*

北海道大学1)

A Trial of Music Education utilizing The Pacific Music Festival in Sapporo

Hiroshi Miura**

Hokkaido University

Abstract—In Hokkaido University, a new type of music education utilizing the Pacific Music Festival held every summer in Sapporo was introduced from the 2002 fiscal year. In this paper, I present the concept of the educational program which aims at helping the students understand all aspects of the PMF, and report the course in detail practiced for the first time. Furthermore, from the experience of the first course, I discuss the concept of fine arts education suggesting the significance of cultural studies. Since fine arts, including music, are essentially connected with culture, the importance of culture for liberal education should be fully recognized.

(Received on February 2, 2003)

1. 芸術科目「ＰＭＦの響き」の誕生

近年，大学における教養教育のあり方をめぐる議論が活発になるに伴い，芸術に関する教育の意義が見直されつつある。「教養」と「芸術」が結びつくことは，西欧中世の「自由学芸(artes liberales)」の精神に照らせば，極めて自然なことである。というのも，教養教育の源流である自由学芸は本来，医学や法学といった実学との対照づけから生まれた領域であり，その視点から現代の教育ジャンルを見直すならば，芸術教育ほど「教養」の名にふさわしいものは見当たらないからである。無論，ここでいう「芸術教育」とは広義のそれであり，美術や音楽を専攻する学生が創作や演奏の技術習得を主として専門的に学ぶのとは主眼が異なる。本稿において主題的に扱う「芸術教育」とは，芸術を扱う教養教育の総称であり，職業人としての芸術家育成を目指す教育でないことを強調しておきたい。そして，芸術教育に属する個々の授業科目を指す場合には「芸術科目」という呼称を使用する。この意味での芸術教育あるいは芸術科目のあり方を模索することは，今日求められている教養の理念を再構築する作業と不可分である。

1) 文学部非常勤講師

*) 連絡先：060-0817 札幌市北区北17条西８丁目 北海道大学高等教育機能開発総合センター高等教育開発研究部気付

**) Correspondence: Center for Research and Development for Higher Education, Hokkaido University, Sapporo 060-0817, JAPAN

北海道大学では，1995年度に教養部が廃止されると同時に「高等教育機能開発総合センター」が設置され，同センターに全学教育（全学的支援により提供される一般教養教育）のカリキュラムを企画する部が設けられた。そこにおいて「大学の校風をつくる最も重要な部分」（阿部和厚他 1998）としてのコアカリキュラム（必須科目）が検討される中，1997年9月25日から27日にかけて北海道大学で国際ワークショップ「これからの大学教育と教育評価」が開催され，最終日には「総合大学に芸術を」のテーマで講演などが行われた。同ワークショップに参加したジョン・ジェンキンス・マサチューセッツ大学芸術センター副センター長は，「芸術科目(the arts)は，21世紀にグローバルな生き方をする学生たちの一般教育にとって，充実した完全なる科目（full partners）である」(Jenkins 1998)と述べた。このワークショップが一つの契機ともなり，全学教育の内容が議論された結果，2001年度からコアカリキュラムの一つとして「芸術と文学」という科目が導入された。筆者は非常勤講師の1人としてその授業に携わり，同時に「コアカリキュラムにおける芸術科目の研究」（座長：小笠原正明・北海道大学高等教育機能開発総合センター高等教育開発研究部長）の研究員を委嘱された。その研究会において，音楽に関する新たな芸術科目のプログラムづくりが話し合われた際，有力な案として提起されたのが，毎年７月に札幌で開催されている国際教育音楽祭，パシフィック・ミュージック・フェスティバル（ＰＭＦ）を利用した授業である。

ＰＭＦは，米国の著名指揮者レナード・バーンスタイン（1918-90）の提唱により，1990年夏に札幌で初開催された。米国のタングルウッド音楽祭，ドイツのシュレスヴィヒ・ホルシュタイン音楽祭をモデルに，環太平洋地域の国際教育音楽祭として創設されたものである。バーンスタイン自身は初回ＰＭＦの閉幕直後に亡くなったが，札幌市とスポンサー企業が遺志をついで継続し，その後ＰＭＦ財団が発足した。1997年7月には，世界屈指の音響を誇る音楽専用ホール「キタラ」が札幌市中心部に開館し，以来，ＰＭＦの主要会場となっている。13回目の開催となった2002年夏は7月6日から27日までの３週間，総計49公演が行われた。その中心は，演奏を学ぶために世界29カ国・地域から集った若手音楽家114人がＰＭＦオーケストラを結成し，練習成果を披露した演奏会である。指導にあたったのは，ＰＭＦ音楽監督シャルル・デュトワとウィーン・フィルハーモニー管弦楽団首席奏者らであった。札幌と近隣市町村の音楽ファンは聴衆としてＰＭＦオーケストラに拍手を送るだけでなく，ボランティアとして運営に協力したり，若手音楽家たちを歓待し，国際交流の催しを実施したりしている。

このように市民あげての音楽祭であるゆえに，これを利用した授業を行うならば，狭義の音楽学にとどまらない内容豊かな芸術科目になることが予想された。学生にとっては，音楽鑑賞だけでなく音楽祭運営のしくみを見聞する機会となり，地域社会に関わる契機ともなる。したがって，大学と地域との連携という観点からも将来性のある授業であり，教室での音楽鑑賞とは異なった，機動的な教育が可能になる。そのような構想のもとに，ＰＭＦというイベント全体を体験するべく創設された授業は，「ＰＭＦの響き」と名づけられた。

筆者が「ＰＭＦの響き」の原案を上記研究会の席で提案したのが2002年2月14日，受講希望者へのオリエンテーションを行なったのが同年４月12日であったから，いわば最短の準備期間を経て企画は実現したことになる。集中講義の形態で初開講された「ＰＭＦの響き」は，指揮者と学生たちの懇談が実現するなど，充実した内容となった。本稿では，初回「ＰＭＦの響き」の経過を報告するとともに課題を提示し，実施経験からフィードバックする形で芸術科目の理念を検証したい。

2. 授業の経過

「ＰＭＦの響き」は瀬名波栄潤・文学部助教授が担当責任者となり，筆者が実際の授業を進行させる形で開講された。まず，受講登録したのは１年生を中心に34人で，所属学部の内訳は法学部4，経済学部2，文学部11，教育学部4，理学部4，工学部7，歯学部1，水産学部1である。したがって農学部，医学部，獣医学部を除くすべての学部に受講者がいたことになる。この授業ではグループ学習が欠かせなかったので，受講者を概ね所属学部ごとに６つの班に分けた。成績評価は，グループ学習への貢献度および「ＰＭＦの意義と課題」というテーマで課したレポートに基づいて行った。最終的には，途中から都合で授業に出席できなくなった3人を除く31人が水準の高いレポートを提出した。

授業の日程は以下の通りである。

①４月12日　オリエンテーション
②６月18日　クラシック音楽鑑賞の基礎講義と曲の下調べの発表
③７月 ２日　講演「ＰＭＦの歴史と現状」,（講師：竹津宜男ＰＭＦオペレーティング・ディレクター）
④７月 ７日　ＰＭＦにおける札幌交響楽団の演奏会鑑賞（モーツァルト「交響曲第39番」，ブルッフ「クラリネット，ヴィオラと管弦楽のための協奏曲」，ウォルトン「交響曲第１番」）
⑤７月10日　講演「ＰＭＦとボランティア」（講師：赤石知恵子ＰＭＦボランティア団体「ハーモニー」コーディネーター）
⑥７月13日　ＰＭＦオーケストラの演奏会鑑賞（ストラヴィンスキー「火の鳥」，ショスタコーヴィチ「交響曲第５番」）
⑦７月15日　演奏会鑑賞の感想発表と下調べの発表
⑧７月20日　ＰＭＦ教授陣による室内楽の演奏会鑑賞（モーツァルト「オーボエ四重奏曲」，ヤナーチェク「六重奏曲＜青春＞」，ブラームス「ホルン三重奏曲」）
⑨７月22日　総括

授業の経過を振り返り，内容の詳細を報告しよう。

＜①について＞

オリエンテーションでは,「ＰＭＦの響き」の趣旨と日程，演奏会チケット代金などについて説明が行われた。約100人がオリエンテーションに参加したが, 最終的に受講を決めたのは既述の34人であった。当初, 受講希望者が多数の場合には履修制限し, 各学部から数名ずつの学生を選ぶ計画であったが，結果的にその作業は不要となった。34人という動きやすい人数になった上，学部構成も概ねバランスのとれたものとなったからである。なお, チケット代金は受講者の自己負担とし，必須で聴く三つの演奏会（④，⑥，⑧）をあわせて最高１万５千円，最低４千円であった。このように開きがあるのは, チケットの座席選択を学生自身にゆだねたからである。受講者の自己負担については賛否両論がありうるだろうが，後述するように好結果をもたらした。

＜②について＞

クラシック音楽の基礎知識を講義したのは，受講者の中に全くクラシック音楽になじみのない学生も含まれていたからである。「ＰＭＦの響き」は音楽学の知識修得を目標とする授業ではないが，音楽を理解し，十分に鑑賞するためには最小限の知識が欠かせない。また，グループ学習を取り入れ，学生が授業に主体的に取り組めるようにするためにも，「交響曲」「楽章」といった基礎知識に関する講義は必要であった。実際, 講義で得た音楽知識を生かして下調べの発表を行った班もあった。とはいえ受講者の中には，楽器演奏を手がけるなどクラシック音楽にかなり精通している学生も少なくなく，そのような学生からは否定的な反応があった。この点に関しては課題として後述する。

＜③⑤について＞

2人のＰＭＦ関係者による講演は,「ＰＭＦの響き」の重要な要素となり，大きな成果を収めた。まず，竹津宜男ＰＭＦオペレーティング･ディレクターは，初回ＰＭＦから携わってきた経験をもとに，会場づくりの経緯から資金の問題までをつぶさに語った。ＰＭＦが札幌で開催されるにいたった経緯や，創設者のバーンスタインが重病をおして札幌を訪れた際の秘話なども披露した。バーンスタインが「若者の教育」と「音楽による平和の構築」を強く訴えたことを話すと，学生諸氏は真剣に聞き入り，ＰＭＦのしくみなどについて質問が相次いだ。一方, 赤石知恵子ＰＭＦボランティア団体「ハーモニー」コーディネーターは，ＰＭＦの裏方を支えるボランティアの苦労と喜びを語ったほか，ＰＭＦのモデルである米国タングルウッド音楽祭の見聞を映像もまじえて報告した。ボランティアは「自己開示」の活動であると述べ，ＰＭＦ2002に延べ634人のボランティアが関わっていることを語った。学生たちは感銘を受けた様子で，レポートに「できれば音楽ボランティアに加わりたい」（水産学部１年女子）と書いた受講者もいた。

＜④⑥⑧について＞

ＰＭＦ演奏会の鑑賞は，この授業の本体というべきものであるが，必須として３つの演奏会を指定した。演奏会選定にあたってはバランスを考え，2点に留意した。第一に, 鑑賞スケジュールが過密にならないようにすることである。どんなによい演奏会であっても，それを連日聴き続けるのには無理がある。日程上, 適当な間隔が必要であり, ほぼ一週間ずつ間合いを置いて3公演を指定したのが好結果につながった。第二に, 多様な演奏に接することである。ＰＭＦオーケストラの鑑賞を基本として，それと他の楽団

写真 1.「キタラ」ホールの楽屋の一室で，指揮者の尾高忠明氏と懇談

の演奏を比較できるのが望ましい。そのため, 地元のプロオーケストラである札幌交響楽団（ＰＭＦに参加している）の演奏も聴いた。また, 大ホールで行われるオーケストラ演奏の鑑賞に偏らないよう，小ホールで行われる室内楽の演奏にもふれさせた。このように3つの演奏会にバラエティーを持たせたことが，学生が新鮮な気持ちで聴き続けるのに役立ったと思われる。なお, 無料で入場できる７月６日のオープニングコンサートについてはオプション扱いとし, 学生の自主性に任せた。当日は小雨が降ったものの, 札幌市郊外の芸術の森・野外ステージで行われたオープニングコンサートに参加した学生が少なくなかった。

特筆すべきは, 札幌交響楽団の配慮により，７月７日の演奏会前にリハーサル見学が実現したことである。当日の指揮者は札幌交響楽団常任指揮者の尾高忠明氏であったが，氏がリハーサルで様々な要求をオーケストラに課し，独自の音楽を形づくっていく様子は学生たちの関心を引きつけたようである。しかも尾高氏の好意により，開演前の多忙な時間を割いて，楽屋の一室での懇談が実現した（**写真１**）。学生たちが,「演奏中，指揮者は何を考えているのか」「札幌交響楽団はどんなオーケストラか」「今日のプログラムの狙いは何か」といった質問を繰り出すと, 氏はユーモアを交えながら丁寧に応答した。間近に指揮者と接した体験が演奏鑑賞にも役立ち, 3公演の中で札幌交響楽団の演奏に最も感動したとの感想が数多く聞かれた。「リハーサルでは弦と管双方の音が強すぎて濁っていたアンサンブルが，本番では澄んで聞こえた。さすがプロだと思った」（文学部１年男子),「客席が埋まっていないリハーサルのときと, 聴衆で埋まった本番では音の響き方が違う」（教育学部１年女子）といった発見は, 生演奏を教材とした授業を行う場合，いかにリハーサル見学が実り多いかを物語っている。今回は授業日程などの都合でＰＭＦオーケストラのリハーサル見学が実現しなかっただけに，札幌交響楽団のリハーサル見学は極めて貴重な経験となった。なお，同日,「キタラ」ホールの楽屋に居合わせた音楽評論家の東条碩夫氏（東京在住), 北海道新聞社文化部の田中秀実記者とも懇談でき，開演前に有意義な時間を持つことができた。

＜②⑦⑨について＞

3つの演奏会を鑑賞させるにあたっては，事前に演奏曲目の内容を下調べさせ，演奏会を聴いた後には感想を発表し合う，という方式で進めた。グループ学習の形態をとり，各班に下調べする曲と作曲家を割り当て，調べた内容をレジュメにまとめて発表させた。学生たちは概ね意欲的に課題に取り組み，発表の際に楽譜や音楽テープを用意してきた班もあった。また，演奏会鑑賞後には全員に感想を書かせ，個人ごとに発表させた。授業時間の制約ゆえにディスカッションするまでにはいたらなかったが，曲の性格，オーケストラの特性，指揮者の解釈，ホールの響きなど多様な側面に着目した感想が目立ち，若い感性がいかんなく発揮されていた。「下調べしたおかげで，音楽の細部がよくわかった」（理学部１年男子），「他の班が作成したレジュメが鑑賞の役に立った」（教育学部１年女子）といった感想が率直に書かれていた。

さらに，学期末に課したレポートでは，「インターネットなどを通じて，札幌の内外でもっとＰＭＦの知名度を上げるべきだ」（文学部１年男子），「ＰＭＦは資金難なので，運営を工夫すべきだ」（法学部１年男子），「問題を解決して，末永くＰＭＦを続けていくようにしなければならない」（教育学部１年女子）といった積極的な意見が多数見られた。受講学生たちは，この授業を通してＰＭＦの意義と課題を実感したようである。

3. 授業の達成度と課題

以上では初開講された「ＰＭＦの響き」の実施経過を述べてきたが，こうした内容が当初の授業目標をどの程度達成したか，また，どのような課題があるかを次に述べたい。

まず，細部の検証を措いて概括的にいえば，「ＰＭＦというイベント総体の響きを堪能する」という授業目標は概ね達成された。というのも，ＰＭＦにおける演奏会の鑑賞，運営の見聞という2つの側面が結果的にバランスよく組み合わされた授業となったからである。音楽祭を利用した授業の真価は，教室での音楽鑑賞とは違ったところにある。その点，リハーサルや指揮者に接して生演奏独自の魅力を味わったことは大きな成果といえる。加えて，ＰＭＦ組織委員会やボランティア団体で活動する人々から生の声を聞いたことは，受講者たちにとって実社会における音楽文化のあり方を考える契機となったはずである。いわばアート・マネージメントの側面を含んだ学習効果があったと考えられる。このことは，将来，市民として，あるいは企業や行政の一員として音楽イベントに関わる可能性を持つ学生たちの貴重な経験である。

実際，レポートには，「クラシック音楽になじんだだけでなく，ＰＭＦのしくみがよくわかった」（工学部１年男子），「ＰＭＦのボランティアの人々は，ボランティアの本来的な姿を実践していると率直に思った」（文学部１年女子）という感想があった。

なお，ほぼ１週間の間隔で3つの演奏会を聞かせたこと，および3公演の選択も好評であったし，チケット代金を受講者の自己負担としたことについても不満の声は聞かれなかった。むしろ，自己負担であったがゆえに積極的に演奏会を聴く姿勢が築かれたといえる。

総じていえば，地元音楽祭を利用した「ＰＭＦの響き」という授業の長所は，単にクラシック音楽を鑑賞したり，音楽史を学ぶのとは違うところにあり，まさに「イベント総体の響きを堪能する」点にある。提出されたレポートに，「みんな生き生きとした顔で授業に出ていた」（教育学部１年女子），「来年以降もこの授業をぜひ続けてほしい」（経済学部１年男子）といった感想が記されていたのも，授業に参加した学生自身が手応えを感じたからであろう。

付言すれば，事故なく授業を完遂できたことは幸いである。受講者の大部分は１年生であり，札幌の地理に不慣れな学生が少なくないにもかかわらず，常に時間通りホールに集合することができた。中には演奏会チケットを自宅に置き忘れ，一旦取りに戻った者もいたが，早めに行動していたことから大きな支障はなかった。ＰＭＦの主要会場である「キタラ」ホールは札幌市の中心部にあり，北海道大学から徒歩と地下鉄で所要時間約 30 分，オープニングコンサートなどの会場となった芸術の森・野外ステージは地下鉄からバスに乗り継いで所要時間約１時間である。あらためて言うまでもないが，大学から１時間圏内に諸会場があることは恵まれた環境である。

しかし無論，「ＰＭＦの響き」には今後の課題もある。

既に繰り返し述べたように，この授業の目標は音楽知識の修得になく，音楽知識を前提としてもいない。しかしそれでも，実際に授業を実施してみると，学生個人間でクラシック音楽に関する知識量の差が

あまりにも大きいため，知識の問題を軽視することはできなかった。楽器を手がけるなどクラシック音楽に十分精通している者から，全くクラシック音楽を聴いたことがない者までを包括する授業は，たとえていえば，十全に古文を読める者と全く古文を解しない者とを包括して「源氏物語」の価値を教える授業と似ている。知識の有無は授業の目標に影響しないが，教育効果をあげようとすれば知識を無視できないのである。一例を挙げれば，クラシック音楽の基礎用語に属する「ソナタ形式」は，既に知っている者にとって説明は無用であり，全く知らない者には説明時間が不足するという事態を来した。この問題は，授業を改善してゆくための最も大きな課題といえる。

そこで改善の方向性について若干提案したい。第一に，「ＰＭＦの響き」においては音楽学の要素を必要最小限にとどめ，あくまでもＰＭＦという音楽祭について学ぶことを中心とするのが望ましい。その理由は，上述したように，この授業の長所が，教室での音楽鑑賞とは異質なところにあるからである。現実に行われている音楽祭の成り立ちを学ぶことを基本として，それに必要な限りで音楽知識を身につけるという方針がよいだろう。無論，この授業を契機としてクラシック音楽に入門する学生があるのは大いに望ましいことであるから，そうした学生が受講にあたって気後れしないような配慮が最大限必要となろう。その点，「この授業が音楽好きの集まりにならないことを祈る」（教育学部１年女子）という指摘は鋭く，傾聴に値する。授業開始時にアンケートを行うなどして，クラシック音楽に関する各受講者の知識量を十分把握し，バランスよくグループ編成を行うことが，円滑な授業進行に必要な教育的配慮である。

第二の課題は，リハーサル見学の拡充である。リハーサル見学が演奏会鑑賞を深めることに鑑みると，授業で聴く全演奏会のリハーサルに立ち会えるのが理想である。リハーサル現場にはＰＭＦ運営に携わる人々も居合わせるから，そこで新たに見聞を広められる可能性がある。長期的には，ＰＭＦ組織委員会と北海道大学が協定を結び，地域連携の一環としてリハーサル見学などをプランに盛り込む方策が考えられる。これは，大学と地域の連携という今日的な課題の一例ともいえるだろう。

以上，課題を列挙してきたが，これは当然，初回「ＰＭＦの響き」を実施したばかりの段階で考えられた課題である。この授業を継続するならば，全く別の観点からも改善さるべき点が見えてくるだろう。

4. 芸術科目の理念の再検討

さて，「ＰＭＦの響き」の実践は，芸術科目の理念と不可分である。本節では，「ＰＭＦの響き」という個別の授業から少し距離を置いて，芸術科目の理念そのものを再検討したい。そして，教養教育と芸術教育が重なりあう特質に着目し，あらためて「教養」の視点から「芸術」の意義をとらえ直すことにしたい。

本稿冒頭で述べたように，芸術家を育成する専門教育と区別された意味での芸術教育は，教養教育の理念が先鋭的に現れる場である。したがって，教養教育の試金石といっても過言ではない。しかるに，北海道大学の教養教育については，「専門教育とは別に教養教育は，すべての人間に共通して必要な一般性を求める一般教育として扱われることになる。しかし，教養教育は専門性も含む人間の全体像を描くときの一部とみなされ，実際にはそこに境界はない」（阿部他 1998）と述べられ，そのコアカリキュラムについては，「わかりやすくいえば，各学部や各学科でミニマムリクワイアメントを構築し，ここに共通するものがあれば大学全体のコアになる。そして，このコアは専門が違っても人間性に普遍に必要な共通する一般性である」（同）とされている。ここで規定されている「教養」の理念は，専門分野のいかんに関わらず，必ずや身につけるべき題材・内容である。端的に言えば，専門的(special,professional)と対義の一般的(general)な性格によって特徴づけられる教養である。実際，北海道大学における「全学教育」の英語表現は general education である。引用文中の「普遍」という語もまた，「一般性」を含意している。

しかし，「一般性」ないし「普遍性」という語は多様な解釈を呼び起こす。そのため，一方では柔軟な発想と実践を許す寛容さを持ちつつも，他方では一体何を目指しての「教養」なのかを不鮮明にするという問題がないわけではない。実際，「教養教育と一般教育の区別は曖昧である。……教養教育は一般教育の一部であり，教養あるいはリベラルアーツとしての目標をもつ科目群である」（阿部他 1999），あるいは「全学生に求められる一般教育カリキュラムによって内実が明らかにされるものとしての“ リベラルな ”教育（“ liberal ”education as defined by the General Education Curriculum required of all undergraduate students）」

(Jenkins 1998) といった苦心の表現には，一般教育と教養教育の説明しがたい関係がはしなくも表れている。そこで，ここでは専ら芸術科目に限り，その「一般性」ないし「教養」の意味を考察しておきたい。

第一に，芸術科目に一般性があるという場合，いわゆる総合科目が持つような諸学総合型の性格を意味しない。例えば，実際に行われた「酒」をテーマとする総合科目では，アルコールに関する化学と，酔いに関する生理学と，飲酒の人間関係に関する文化人類学をミックスした授業が構成された。これは一種の文理融合型（シナジー）科目ともいえ，総合大学がメリットを生かして学生に提供しうる最良の教育の一つではある。しかし，芸術科目が持つ一般性とは，そうした集積の総合性とは別である。むしろ，芸術学・美学を除くどの特定分野の学問にも直接には与せず，諸学の隣接領域にとどまり続けるところに芸術の身上がある。言い換えれば，個別諸学に従属せず，かえって諸学から解放された領域に定位する。その意味で，芸術教育はリベラル(liberal)，すなわち「解放されている」自由な領域である。芸術教育がリベラル・エデュケーションであると言われるのは，特定の専攻領域に束縛されずに，高等教育を受ける者のすべてが学ぶに値する「一般性」を有するからである。言うまでもなく，こうしたオアシス的性格は芸術が元来，固有に持つものである。「芸術，人文学，科学の統合，及び一般教育と専門教育との間の垣根の除去」(Jenkins 1998) が提案されうるのは，それだけ芸術が独立した固有の性格を持ち，かつ今述べた意味での一般性をも有するからなのである。

関連していえば，同様の一般性は倫理教育にも該当する。例えば北海道大学では「テクノ・エシックス」（科学技術倫理）の教育プログラムが実施されつつあるが，この種の倫理教育は，高等教育を受ける者のすべてが学ぶべき一般性を有する。これは，教養教育が全人教育の別名であることの証左でもあり，「人間性を養うという目的からみた教育のことを指し，全人教育にも関係している」（阿部他1999）といわれる所以である。してみると，「真・善・美」の追求という古典的な教育目標は今も決して色褪せていない。大学における個別諸学，倫理科目，芸術科目のそれぞれは，現代的な「真・善・美」の教育を担っているわけであり，今日「教養教育」の名で求められているものは，どちらかといえば「真」以外の領域に重点を置いてバランスを回復する動向といえよう。

第二に，今日，大学の教養教育が一般的性格を持つと言われるとき，しばしば，その「一般的」は「基礎的(foundamental,basic)」と同じ意味で語られる。たとえば，「（全学教育の）コアカリキュラムを，専門教育側からみて必須の一般教育としてとらえることになる。……専門性を支える一方の中心（コア）ともみなされる」（阿部他1998）というとき，専門教育の基礎としての教養教育が語られている。しかし，芸術科目はそのような意味での基礎性を持たない。すなわち，工学研究にとって数学が，医学研究にとって生物学が，あるいは広い意味で語学が学問の基礎であるというような意味で「教養」をとらえるならば，芸術科目はそのような教養とは身分を異にする。確かに，芸術は美的感覚や直観能力を介してすべての学問に創造性を賦与するが，決して下位の基礎を構成するものではない。むしろ，基礎を応用へと発展的に媒介する際に芸術的感性は大きな役割を演ずるのであり，「大学における芸術の導入は，理論的学問と実際的応用とを統合する活動に起源を持つ」(Jenkins 1998) と述べられている通りである。

上述の考察を踏まえれば，芸術科目が有する「一般性」は，専門諸学から解放されたリベラルな性格と，それでいて諸学に寄与する隣接的な性格によって特徴づけられる。解放されつつ寄与する，こうした性格は大学教育における「教養」の意義を再考する際の手がかりになるのではないだろうか。また芸術科目には，従来とはやや違った意味での「文理融合」教育を提示できる可能性がある。つまり，文系と理系の学問内容を融合するのではなく，専攻領域との関わりを全く問題にしない視点から，全学生に通底する人間教育を行う可能性である。

以上述べてきた論点を含め，筆者が芸術科目の理念として提案したいのは以下の5点である。

①教養としての意義　芸術科目は直接的な実用性から解放されているという意味で正統な自由学芸(Liberal Arts)に属し，いかなる専門分野に身をおくにせよ，高等教育を受ける者が学ぶに値する教養である。芸術鑑賞の能力を高めることや，鑑賞した内容を表現する力を養うことは，刹那的な娯楽とは区別された意味での，精神的価値を有する教養である。

②生涯学習　多感な青春時代に芸術に接することは人格形成に有意義であり，その後の人生において心豊かに実生活を送る糧となる。その意味で，芸術科目は生涯学習の一翼を担う。

③**専門分野への創造性賦与**　芸術科目で養われる感性，鑑賞・批評能力（審美眼），想像力を創造的に専門分野での勉学，研究に役立てる。感性や想像力を介して，芸術はあらゆる領域の学問と隣接しており，創造性を賦与する。

④**芸術学研究者の発掘**　学生が潜在的に持つ芸術への関心を引き出し，芸術学研究を志す者を発掘する。そのために，文献学など芸術研究の学問的方法や，レポート・論文の作成法など研究成果のまとめ方を教授することも重視する。「芸術とは何か」という深遠高邁な問題についても，「正解」ではなく探究方法の教授につとめる。

⑤**社会への還元**　文化・芸術の振興という観点からすると，高等教育機関が芸術の理解者を恒常的に育成することは今や社会的使命である。芸術系大学に限らず，広く一般大学が自覚的に芸術教育を行わなければ，実社会における芸術の発展も望めない。したがって芸術科目は，社会の福利増進という大学本来の存在理由からしても有意義な教育ジャンルであり，コアカリキュラムに含まれるべき必然性を有する。

あえて付言すれば，「教養」という言葉に衒学的な雰囲気がつきまといがちだからといって，遠ざけるのは当を得ない。大学が大衆化した今日であればこそ，教養を持つ者がその幸福を語れる社会となるよう，つとめて大学人は教養について語るべきではないだろうか。その場合，「教養」と「娯楽」，あるいは「芸術」と「娯楽」とを区別する視点が欠かせないと思われる。大学がレジャーランドではないように，教養教育は決して娯楽の提供ではないはずだからである。集中講義「ピアノ音楽の楽しみ」を行うため2002年７月，北海道大学を訪れた渡辺健二氏（東京芸術大学助教授）に考えを伺ったところ，「芸術科目を行う意義は自己表現にあり，娯楽とは違う面を持つ」ということであった。

この視点から「ＰＭＦの響き」について再度検証するならば，警戒すべきは「楽しんで単位がとれる」（工学部１年男子）という娯楽感覚の受講姿勢である。もちろん，大学における教養教育が生涯教育の一端を担う以上，授業を通して音楽に親しみ，純粋に楽しむという体験の意義が否定されるべきではない。しかしまた，高等教育の一環として行なう以上，単純な意味で音楽を楽しみ，感想文の提出に終わるのでは不適当なのも事実である。「ＰＭＦの響き」が単なる娯楽の時間ではないという考えに基づき，筆者は受講学生に段階的な成績評価を行った。グループ学習などにおける授業への貢献度とレポートの内容を総合的に評価したのである。最終回の授業でレポートの書き方を指導し，どのような点を評価するかを明らかにしたので，公正な評価ができたと考えている。

一般に芸術科目を構想する場合，「芸術とは何か」「どこまでを芸術とみなすか」といった難問や，成績評価をどうするかといった問題に終始悩まされる。それらの問題に対する厳格な解答は見つからないにせよ，芸術と娯楽の区別は常に念頭に置くべきではないだろうか。初回「ＰＭＦの響き」を実践して再認識したのは，そのことであった。

5. マサチューセッツからの風

最後に，北海道大学における芸術科目の取り組みの意義を考えてみたい。

校史をひもとけば，北海道大学の前身である札幌農学校の２期生であった新渡戸稲造は母校の教師となって教養教育を充実させた人物である。新渡戸が学外に「遠友夜学校」を開き，無報酬で子供たちに教育を行なったことはよく知られているが，このほか「農学校学芸会」を組織し，文学や芸術に親しむ活動をも展開した。そこには，農学校とはいえ実学に終始せず，自由学芸（リベラル・アーツ）をも志向する全人教育の理想があったと推察される。したがって北海道大学には，芸術科目を育む土壌が明治時代からあったといっても過言ではなく，無論，その校風は札幌農学校の教頭ウィリアム・スミス・クラーク博士を抜きには語れない。

筆者は「ＰＭＦの響き」の最後の授業で学生たちに，ＰＭＦの創設者レナード・バーンスタインと，かのウィリアム・スミス・クラークがともに米国マサチューセッツ州の出身であることを話した。前者の生誕地ローレンスは，後者の生誕地アマーストと120キロメートルほどしか離れていないから，広大な北米大陸の中では隣町のようなものだろう。1876年と1990年，約120年の時を隔てて札幌に立った２人は，かたやマサチューセッツ農科大学学長，かたや世界的な大指揮者であったが，晩年を若者の教育に捧げた点で共通する。そして，クラークが札幌にもたらしたものが化学と園芸学にとどまらず，「ビー・アンビシャス」の精神であったように，バーンスタインのも

たらしたものも音楽にとどまらない。初回ＰＭＦの開会式でバーンスタインが語った「芸術と人生の関係」という言葉は今も重く響く。大学教育と人生の関係が問われている現在であればなおさら，芸術教育の意義を示唆する言葉である。

史上，米国が札幌に与えた2人の人物は，教育に賭ける情熱をまとったマサチューセッツの風であったといえるかもしれない。

マサチューセッツからの風は今も吹き続けている。クラークが初代学長をつとめたマサチューセッツ農科大学を前身とするマサチューセッツ大学は北海道大学と姉妹校提携しており，そのジョン・ジェンキンス副学長は，本稿で繰り返し引用したように示唆に富む提言を多数行っている。「芸術は人生を模倣する以上のことを為す(The arts do more than imitate life)。すなわち，芸術は人生を解釈し(interpret)，説明する」(Jenkins 1998）とは，おそらく哲学者アリストテレスが述べた「芸術とは模倣である」(『詩学』）及び「技術（芸術）は自然を模倣するが，他方では自然が為す以上のことを為す」(『自然学』）を念頭に置いての言葉であり，こうした哲学的フレーズが的確に用いられること自体，大きな教養を示す。ここでいう「解釈」とは，人生の事実を記述することを超えて，人生の意味を表現する芸術の営みを指す高度な表現である。およそ全人教育を担う教養教育にはすべからく，物事の意味を「解釈」する能力の育成が含まれていよう。

さらに，「グレイト・ブックスを学ぶ大学」として知られる米国セント・ジョーンズ大学では，クラシック音楽も「古典」として教材に含まれているという。ホメロスの「イーリアース」に始まるグレイト・ブックス（170-180冊）の中には，バッハ，ベートーヴェン，モーツァルトが入っており，音楽家への志向の有無とは無関係に，クラシック音楽が教養として扱われている。メリーランド州アナポリスの同大学音楽科で教授をつとめたヴィクトル・ツカーカンドル(Victor Zuckerkandl)は“ The Sense of Music ”と題した入門書を上梓している。入門書とはいえ，体系的な音楽構造の説明は十分に学問的である。ギリシャ語とラテン語を必修とする同大学の古典主義，教養主義は徹底的であり，日本の教養教育の理念から見れば先鋭的に過ぎるかもしれない。けれども，そのような教養主義の原理が米国の他大学に穏健な形で普及していることは見逃せない。大指揮者となったバーンスタイン自身，音楽大学の出身ではなく，ハーバード大学で法学を学びながら作曲をたしなむアマチュア音楽家として出発した。ツカーカンドルによれば，ハーバード大学では早期から芸術教育が実施されていたという。

クラーク博士が札幌にやって来る5年前の1871（明治４）年，岩倉具視の視察団が米国を訪問したとき，音楽を用いた倫理教育に驚き，中国伝説の皇帝，尭と舜が述べた音楽教育がここで実現されていると感嘆したと久米邦武は『米欧回覧実記』の中に記している。しかし正確に言えば，こうした芸術教育は米国の歴史よりも長い。古来，優れた哲学者たちは，人間の本質に目を向けるとき，教育と同時に芸術を重視してきた。古代ではプラトンやアリストテレスが，近現代ではディルタイやホワイトヘッドが，人間存在の考察を踏まえて芸術を称揚している。ミュージック music という語は，今でこそ「音楽」に限定されて用いられているが，語源の「ムーサ（Μουσα）」はあらゆる芸術と学問の女神の名である。ミュージアム museum まもた語源を共にしている。古代ギリシャ語のムーシケー（ムーサ的）が，ただ音楽をたしなむという意味ではなく，「教養を有する」という意味であったことは示唆に富んでいる。

翻ってわが国の現状に立ち戻るならば，折しも2001年12月７日には「文化芸術振興基本法」が施行された。その第17条では「……文化芸術に係る大学その他の教育研究機関等の整備その他の必要な施策を講ずるものとする」と謳っている。既に述べたことだが，文化と芸術を教育ジャンルとして考えたとき，大学と地域との連携は重要となろう。文化も芸術も，人間の脳裏や書物，キャンパスの中に封じ込められているわけではない。その点，音楽祭を利用して芸術教育を行う試みは，生きた文化を若い学生たちに体感させることにつながる。ひいては社会参加を展望する人間形成の基盤となり，いわば「生きた教養」となる。「ＰＭＦの響き」の主要な特長はその点にあり，音楽祭を利用した芸術科目は，教養教育の一端を担いうるだろう。

参考文献

阿部和厚（1998），「高等教育に関する国際ワークショップ＜これからの大学教育と教育評価＞ま

えがき」,『高等教育ジャーナル－高等教育と生涯教育－』**3**，1-6

阿部和厚他（1998),「全学部に共通するコアカリキュラム－全学教育は校風をつくる－」,『高等教育ジャーナル－高等教育と生涯教育－』**4**，1-13

阿部和厚他（1999),「全学共通コアカリキュラムの具体的構築」,『高等教育ジャーナル－高等教育と生涯教育－』**6**，77-90

Jenkins, A.John(1988), “ The Reality of Arts in the University: Educating Students for a Democratic Society ”, 邦訳「芸術学部をもつ総合大学として：民主社会のための学生教育」,『高等教育ジャーナル－高等教育と生涯教育－』**3**，199-220

神林恒道（2002),『美学事始』，勁草書房

札幌市教育委員会（1991),『札幌と音楽』，さっぽろ文庫 57，北海道新聞社

高辻正基（1998)『文理シナジーの発想：文科と理科の壁を越えて』，丸善ライブラリー 269，丸善

Zuckerkandl, Victor(1959), “ The Sense of Music ”, Princeton University Press, 邦訳『音楽の体験 音楽がわかるとは』, 馬淵卯三郎・大谷紀美子訳（1982 年），音楽之友社